

---

# 時忘れの祈り

つきよし 風桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時忘れの祈り

### 【Nコード】

N5396J

### 【作者名】

つきよし風桜

### 【あらすじ】

終わりゆく世界の中、生き続ける事を定めとされた、哀れな少年兵。その物語は、彼と同じ運命を辿る少女との出逢いにより……ゆっくり、ゆっくりと、その速度を落としていく。

## プロローグ（前書き）

注意！

これから始まるのは、凄く悲しく暗い物語です。  
明るさとは無縁なので、ご注意ください。

## プロローグ

乾いた風に、頬を撫でられて。重い瞼を開けると。  
ずっと。ずっと。恋焦がれていた蒼が。視界一杯に広がっていた  
んだ。

嗚呼。

手を伸ばせば。あの蒼に。この穢れた手を、浸す事が出来そうだった。

届いてほしかった。

もうじき、届くかもしれない。

俺は。きつともうすぐ。空だって、飛べるんだ。  
この重い身体を、此処に残して。永遠という名の束縛から、解き  
放たれて。

自由に、飛べる。何処へだって、行ける。

それなら。

それなら、最後に。あの子の所へ、行きたい。

行けるだろうか。

行っても、いいだろうか？

行ったら。

あの子は。いつも笑顔だったあの子は。泣いてしまっただろうか。

……なら。

やっぱり、駄目だな。

目を閉じると。

熱い、熱い、水。雨が降っている訳でもないのに。

きつと、空から降ってきて。俺の頬を伝った。

哀れで、穢きたなくて、只管に醜いこの世界を。

あの蒼空の向こう。高い、高い所から見下ろしている神様とやらが、もし其処に、本当に居るのなら。

どうか聞いて欲しい。

俺の事なら、もういいから。十分だから。

せめて。あの子だけは。

ずっとずっと、笑顔のままで。

## 第一話

「俺、もう無理かもしれない」

彼がそう言い出したのは、兵士輸送車の中での事だった。

凸凹の多い道。かつては林道であった其処も、最早荒廃した無の大地に過ぎない。

その無を抜け。赤と、更に深い空虚に染まる、戦場へと。無感情に走り続ける、車。

狭い空間に詰め込まれているのは、一様の格好をした兵士達。その中に『彼』は居て……隣には、何時もの様に彼が居た。

厚い皮の、くすんだ色の鎧を纏ったその集団は。皆、既に死んでいるかのように押し黙っていた。

誰もが、終わる事の無い戦で。疲弊しきっていた。

だから、その中で。彼がそんな消極的な事を口にしても、その場に満ちる沈黙は揺らぐ事は無かった。

「もう、無理だ」

彼が、再度繰り返し紡ぐ。恐らくは、独り言だったのだと思う。それでも。塞いでいた筈の聴覚を経て、『彼』に届いてしまったから。

「……そんな事を言って何になる」

『彼』は、低く、低く呟いた。そして繰り返す。

「そんな事言つて、何になるって言つんだ。無理だから、何だつて言つんだ。……死ぬのか。今日」

「……どうだろう」

そう言つて。彼は、目を細め。微かに、口の端を、上げた。

彼は笑っていた。泣きだしたいのを、我慢しているようでもあった。

しかし『彼』に、それは解らない。表情に変化が起きた、としか、『彼』には認識できなかった。

「フレイ」

彼の名を呼んで。それきり。

どうしたんだ、と。『彼』は、言う事が出来なかった。

その疑問を口にする前に。

フレイ「クルー」は。戦場に生きる者にとっては、あるまじき行為を取ったから。

「そうかもな。……死ぬ、か。……そう、そうかも、知れないなあ」

枯れた声で言つた彼の、乾いた皮膚を伝う。揺れる鉄の床を濡らす、ほんの一筋の光。



そう。彼は涙を流した。

世界が終われば。それと一緒に、きっと自分も死ぬ事が出来るの  
だろうと、『彼』は思う。

昨日無抵抗に敵の刃に散った……『フレイ＝クルー』という存在  
のように、と。

フレイと『彼』は違う存在だった。

同じ人間でありながら、違う存在。

個性とか存在意義とか、そういう事で区別しているのではない。  
自らと共に在る帝国が、世界で……崩壊を続ける世界で生き残って  
いく為に、終焉まで戦い続ける兵士であるという事以外に。彼等  
は個性も、存在意義も無いから。

それでも、違うというのは。

フレイには、限りがあつて。『彼』には、それが無かった。そういう事だ。

皮肉なもんだ、と。

独り、家路を辿っていた『彼』は。厚い雲に覆われた夜天の下、立ち止まり。ある建物と向かい合った。

教会。

……それが崇めている神様。

もし居るのなら、相当に意地が悪い奴だな、と。彼は思う。

世界が、壊れはじめて。終焉は間近に迫っていた。  
それなのに。そんな時になって、不死の者は生まれた。

かつての世界で、渴望された不死。  
それが、実現された今は。羨望ではなく、哀れみの眼差しを向けられる対象となっているのだから。

崩壊の間接的な原因は、戦争で。直接的な原因は、魔導兵器の使用。

世界の支配者となる為に、兵器開発を競った各国。その急速な競争の中、生じた強大すぎる魔導兵器は、何時しか時空を歪めるまでに至り。

それを。ほんの一度だけ。使用してしまったばかりに。時空の崩壊はしまった。一度崩れてしまった均衡を元に戻す術は無く。

軍事大国は残された土地を領有するために、以前に増して戦争を行うようになった。

『彼』の仕える帝国……グラシアも、その一つ。

愚かだ。『彼』は、知っている。

そんな事をして。罪なき人民の命を奪い、勢力を伸ばしても。それは既に意味の無い事。

余計に終りを近づけるだけの事だ。

けれど。だからこそ、『彼』は帝国の為に戦おうと思う。  
この世界が滅んでくれる事を。心待ちにしているから。

宵の闇と、包帯の下に蹲る、肩の傷の痛みの中。『彼』は不意に目を閉じ、風の音を聞いた。

『彼』の黒髪を柔らかに撫で、過ぎ去っていく。涼やかで、何処か乾いている風。嫌な感じのする風だ。

『彼』はそのまま。暫く、動かない。  
いつの間にか。彼の脳内で反響するのは、今此処に在る風の音で  
はなく。

彼の、声になっていた。

死ぬ、か。  
そう、そうかも、知れないな。

「……フレイ」  
何故。この名を。今。

……と。

「泣いてるの?」

その時。フレイの木霊が。高く綺麗な、少女の声に、変わった。

泣く……そんな馬鹿な。

『彼』はそう思う。しかし、声には出さず。  
ただ黙して、振り返る。

其処には、やはり一人の見知らぬ少女。

彼女は、白い少女だった。

腰のあたりまで伸びた、長い銀色の髪。

『彼』が雪というものを知っていたなら、そう形容したであろう美しい肌。

白いワンピースを纏い。

そして、『彼』と同じ、灰色の瞳をしていた。

こいつも、そうなのか。

悟った『彼』が、まじまじと少女の姿を見詰めていると。

彼女は。柔らかく微笑み。

「良かった。君は、泣いてなかった」

柔らかな声音で、そう言った。

## 第一話（後書き）

どうも、風桜です。

……暗い話を書きたくなりました。というか、思いついてしまいました。

『レイルズリードの風』という別の連載をメインに進めていきますので、此方はゆっくり更新になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5396j/>

---

時忘れの祈り

2010年10月9日01時10分発行